福島復興の
次世代フェーズ

晃華学園中学校高等学校

F:NeXt

01 3年間の活動

晃華学園中学校高等学校では、
3年前から他校と協働して福島復興に向けた
様々な取り組みを実施。

自主ツアーの実施

販売活動

出張授業

これらの活動の中で、下の世代の意識が
徐々に変化してきていることに気づいた

小学生の世代には、東日本大震災が「存在しない」

02

現在の中学1年生は、2011年4月以降生まれ。
今の小中生にとって、東日本大震災は
「生まれる前の出来事」＝「教科書の出来事」に。
結果、自分事化しにくい状況になっている。

13年が経ち、
風評被害が減る一方、
震災の「風化」が
進んでいる。

東日本大震災を伝えていく行動にまつわる課題が、
『震災被害をどう知ってもらうか』から、
『次世代に、東日本大震災を
どのように自分事化してもらうか』
に変化している。

03 抱えるジレンマ

福島の復興までは時間がかかるため
あるジレンマが生まれてしまっている。

現在の小学生世代は震災後以降に生まれており、自分事化しにくい

ジレンマ

現在の小学生の世代が成長した頃に、東日本大震災の最大の課題である、県外最終処分の時期がやってくる。

今後の課題

東日本大震災を経験していない世代に、
東日本大震災を自分事化してもらうために、
今までとは違った工夫と取り組みが必要

福島復興への支援活動は、次のフェーズへ進んでいくことが求められている

04

今までのスタンダードであった
「体験を語る　聞く」という方法では、
東日本大震災を体験していない世代が
より自分事化しにくくなっていくのではないか？

自分とは
遠い世界の
出来事に
感じてしまう

他人の体験を「聞く」のではなく、
自分で「体験する」「調べる」という
能動的な動きに変えていくことによって、
自分事化しやすいキッカケを与えていくべき。

05 首都圏の中高生がハブに

若い世代にとって、自分事化しやすい条件は、
「身近な人が」取り組んでいる、話題にしている、である。
首都圏の中高生が、ハブ(人を繋ぐ)機能を果たしていくべき。

〈タテ(世代)のハブ〉

私たちのような
「生まれてはいたけど、
記憶にはない」という
両方の世代の気持ちが
分かる現在の中高生が、
そのハブ機能を
担っていきたい。

〈ヨコ(地域)のハブ〉

県外最終処分にあたって
その理解を得るために
「福島県内の人」と
「福島県外の人」を
繋ぐ役割が重要であり、
そこを首都圏の人間が
担っていきたい。

具体的なアクション 06

私達は2025年3月に小中高校生を対象とした
自主イベントを開催する予定である。
ぜひ環境省の方々にお越しいただき、
「正しく懼れる」ために必要な情報を
「身近に受け取る」機会を設けたい。

大人が企画・運営を行うのではなく
生徒自身が企画・運営を行うことで
情報を得ることへのハードルを下げる
私達は大人と中高生世代を繋ぐ
存在として機能していきたい

07 3年間の総まとめ

私たちの学校では
「ノブレス・オブリージュ」
という言葉が掲げられ、
「すべて多く与えられた者は
多く求められ、多く任された者は
更に多く要求される」
と考え、行動している。

私たちは幸運にも3年間に渡って、
福島について多くを学ぶ機会を
与えていただいた。だから次は、
次の世代が福島について学ぶ機会を
私たちが作っていきたい。